The Japanese Geotechnical Society

特別講演

小説と事実

光岡　明（みつおか　あきら）
作家

まず最初に言葉についてお話します。

私は子供のころ，天草諸島に突き出している宇土半島の南岸の小さな集落で遊んでおりました。前は不知火海。母の里です。貝掘り，シャク採り，干潮になると沖に現れる洲の上の魚とりなど，海は遊びたわむれる所でした。不知火海は内海で音もなく満ち引き，水平線は霞に煙って，実に静かで，妣なる海という感じでした。最近は養殖業が盛んで，タイ，ハマチ，フグなどが養われています。

そういう私が与那国島に行きました。島のまん中の宇良太山に昇って見渡すと，360度海，水平線です。大海と絶海の孤島。海は盛り上がるようであり，悪意も善意もなく，人間世界と別の所にある。どうしようもない量感と存在感がある。その夜，私は島が沈むのではないか，と眠れませんでした。

私がバチャバチャ遊んだ不知火海と，地球を覆いつくすような与那国の海は，はたして同じ海でしょうか。

熊本県内に緑川，白川という一級河川があります。この二つの川をヘリで上空から見たことがあります。長さはそう変りませんが，涵養面積は緑川が白川の2.5倍あり，緑川の支川57に対して白川は13です。緑川は九州山脈の深山幽谷と言っていい高山から出ますが，白川の源流は阿蘇・根子岳で，ふつう涸れてます。緑川はその名のとおり水量豊かで，約一万ヘクタールの水田を養いますが，白川は何本もの井手に分流され，それでも四千ヘクタールしか養いません。白川はしかも阿蘇カルデラ内の排水路よろしく暴れ川です。沿線住民がそれぞれの川に寄せる思いは，上中下流の住民連携を見ればわかります。緑川では河口の天明町の漁民が源流の内大臣に植林していますが，白川沿線住民にはそんなことはありません。

それぞれの沿線住民にとって，この二つの川は同じ川でしょうか。

私たちは不知火海も与那国の海も海，緑川も白川も川という等質の言葉でくくります。そして世界は等質な言葉の連続した網目として理解します。ヘレン・ケラーが井戸水の下に手をやって，その名を理解したとき，彼女は世界理解へ入って行ったのです。等質な言葉は人間コミュニケーションの大事な材料ですが，では「部屋の中に机がある」という言葉はなにか伝えているでしょうか。さまざまな部屋，さまざまな机があるでしょう。

作家は等質な言葉に自分の経験を与えようとします。私にとって不知火海と与那国の海は違い，緑川と白川は違います。作家は自分が名付けた固有名詞で文章を綴る，と言っていいと思います。名付けるということは，本来，神がすることで，始源を語る神話を見ればすぐわかることです。阿蘇にも阿蘇神話があって，さまざまに名付けを語ります。私たちは神ではないのですが，例えば私は「行ったり来たり」という水の精みたいなものを書きましたが，評論家の方たちは死語に命を与えた，なんともかわいらしい生物を創造したと評されました。そこが工学系，技術系の方々が使う言葉ともっとも違うところではないでしょうか。

次に時間についてお話します。

阿蘇外輪山の北麓に，手野という集落があります。そこに阿蘇を開いたタケイワタツノミコトの子ハヤミカタマノミコトが植えたという大杉がありました。大人7，8人で根元を抱えても手が届くかという亭々たるご神木で，天然記念木でもありました。その大杉が平成3年の台風19号，風速60メートルでしたが，ねじり切られました。その後，手野の区長さんを訪ねる機会があったときに，私が自然は偉大なものも作るけど，無残なこともしますね，と言ったら，区長さんはまだ境内に残っている200年ばかりの杉の木7，8本を指さして，なあに，こいつらを500年かけて育てますたい，と言われました。

私は感動して足が思わず止まりました。500年先のイメージを見ている人がいる。高度成長期のころ未来学というものが流行しましたが，500年後とは私など考えたこともなかった。少なくとも日常の言葉では出てこない。みなさん方は科学者ですから500年後のことは，考えても非科学的になると排斥なさるでしょうし，考えないのが正しいとおっしゃるかもしれない。しかし500年後を考えるというのも人間です。

私は先日，長崎県の原城趾に行きました。ここは寛永14年12月から天草四郎を首領とする農民一揆が立てこもり，翌15年2月の幕府軍12万人の総攻撃を受けて，3万7千人が虐殺されたいわゆる天草・島原の乱のあった所です。いまからちょうど360年前のことです。原城趾は周囲約4.4キロ，長崎広島以上のジェノサイドだとある学者が言われました。いま行きますと，女子供が隠れたという空濠跡がありますが，あとはなんにもない，静かな公園です。

過去は現実にあったことだから，確実にわかるかと言うと，幕府側の史料はたくさんあっても，一揆側の史料はなにひとつない。しかも3万7千人の99パーセントは無名の人です。この人たちの思いに近づこうにも，原

NII-Electronic Library Service

The Japanese Geotechnical Society

城趾にはうらうらと日が照るのみで，どうすることもできない。3万7千人の鬼哭は聞えないのです。この知覚できない時間に対して，私たちは空と無情，一切生生流転，縁起輪廻，解脱と救済という形で接してきました。

中国の孔子が「逝くものはかくの如きか，昼夜をおかず」と言い，鴨長明が「ゆく河の流れは絶えずして，しかも，もとの水にあらず」と書いたように，私たちは時間というものはこの世界に実体のように厳然と存在し，決して停止せず，二度と帰らず，連続し，定まった方向を持っている，と考えています。過去から現在へ，そして未来へと一直線に流れており，私たちはその時間に添って，とぼとぼ歩く旅行者といった感じを持っています。時間は人間を一定方向に連れていく実体だと観念しています。

作詞家で作曲家の小椋桂さんが朝日新聞で「シクラメンのかほり」について触れ，詞は北原白秋，曲はプレスリーの寄せ集めで内心忸怩たるものがあるのだが「言いたかったのは一行だけ，時間というものは人間が生み出した観念なのに，産み落とされた瞬間から人間の言うことを一切きかない，ままならないこどもになる。それを私は『時が二人を追い越していく』と歌った。それだけでよかった」と書いています。

時間は人間が作り出した観念だと言うのです。先の一直線の時間を私たちは現実自然の時間として疑ってはおりません。しかし実体ではなく観念だと疑うことはできるのです。ただ今の時代は一直線の時間が優勢です。より良い未来を信じてきた啓蒙思想がその根底にあります。しかも原因と結果を実験する因果関係は一直線の時間の上にあります。因果関係こそ科学技術の基礎です。しかも私たち日本人は高度経済成長という裏打ちを得て，一直線の時間の存在を信じてきました。この実験は制度化され，効率が追求され，製品から商品になることによってシェアの拡大が至上命令とされ，企業社会から産業社会へ，そして管理社会へとなったのです。時間で言えば線型社会の完成と言っていいでしょう。

私は先に時間は観念だと疑うことができると言いました。先学によれば，時間は物体や物質の運動変化，行動や意識の内容，生産や知識情報と結びついてしか発現しない形式と考えることができると言われます。実体ではなく形式だというのです。大杉を500年かけて育てるという手野の区長さんの発言は大杉によって発現しており，原城趾の私の感懐はまさに感懐によって生まれています。

かつて農山村には巡る四季による円環時間が流れていました。五木の子守唄でも有名な熊本の五木村は本当の山村です。高齢化と過疎化が進んでいますが，いまでも五木村は自給自足が原則です。平地農村と違って五木村はいまでも30品種に近い作物を作ります。村長さんに言わせると「買うのはハクサイとキャベツぐらいかな」ということで，蛋白源にしても川魚，鹿，猪です。

春に種子まき，夏手入れ，秋収穫，冬準備という繰り返しであって，それ自体閉じて回っています。始まりも終わりもなく，農作業と祭祀を含む村の暮らしと密着し，村民一人一人に等身大の時間として流れています。しかもこの時間は一定速度では流れません。農繁期，農閑期という言葉を考えるだけでいいでしょう。その時間は「時」と「間」に分れている，とある学者は言います。「間」は眠りであり，再生のための死です。人間死ねばおしまいではないのです。植物の再生がその時間を裏づけるわけです。

また一期一会という時間もあります。千利休の弟子山上宗二が書いた本のなかに出ますが，直線時間が止まる点としての時間です。結婚，誕生，死別，あるいは痛烈な裏切りなど，人生のなかでの重要事件は必ず点として記憶されるばかりでなく，今現在を生きている私たちを縛っています。あるいはその時点で時を止めてしまってあとの時間を放棄している人さえいます。芸術的感興も同じです。いい作品を書くという一点へ向けて，芸術家は時間を使うのです。

森鴎外に「かのやうに」という短編があります。歴史学者を目指す若き貴族学徒が主人公ですが，面積のない点，幅のない線というものを前提にして幾何学が成立するように，永遠の真理，絶対の自由，完全なる平等，ひいては神仏というものが証明されないにしろある“かのように”考えないとこの世界は理解できない。しかしドイツの実証主義を勉強した主人公はそのはざまで悩むのです。

私なども人一人，犬一匹の一というものはなんだろうか，ゼロという数字が意味するものはなんだろうか，虚数というものを高校時代に習ったけれども一体なんだろう，という思いはあります。厳密な証明を要する数学でさえ“かのように”の上に成立している。

結局過去も未来も知覚できません。過去は想起，言葉でしか語り得ない。しかしその言葉は経験をめぐって揺れている。未来を語り得るものは社会科学を含めて科学的法則でしょうが，知覚できないのだから可能性だけです。起こったものは起こった，起こらないものは起こらないというだけで，価値判断をしないのが科学的法則でしょう。人間が脱落します。そこを補うために人間は「かのように」なるものを置いてきたのではないでしょうか。

いま私たちは過去からも未来からも攻撃を受けている気がします。線型時間の中で生きるとき，時間が不再帰だからと言って忘却のかなたに追いやるのでなく，未来が科学法則以外わからないからといって人間的判断をやめるのではなく，過去からは歴史と伝統を，未来からはそれこそ「かのように」を付け加えて，明るい展望を持つようにしなくてはいけない，と思います。

（原稿受理　1997.7.24）

NII-Electronic Library Service